

金子市長が就任2期目の所信を表明

6月11日、金子健次市長が、平成25年第3回柳川市議会定例会で就任2期目の所信表明を述べました。その一部を紹介いたします。



市議会定例会で所信表明を述べた金子市長

本定例会は、私の2期目の市長就任後初めての定例会ですので、今後の市政運営に対する私の所信の一端を述べさせていただきます。皆さんのご理解とご協力をお願いするものです。

1期4年を全力で務めました。まだまだ多くの課題が山積しています。これからも、市民の皆さんの期待に応えることができるよう、柳川の捨て石になる覚悟で、全力で取り組んでいきます。

柳川市は合併から8年を過ぎ、2年後には合併10年の節目の年を迎えます。合併の優遇措置である普通交付税の合併算定替が2年後から段階的に縮小されるとともに、合併特例債の活用期限も7年後に迫ってきました。私は、これからの4年間は、将来の柳川を形づくる上で大変重要な時期であると考えています。

今回の選挙の中で、私は6つの政策を掲げ、次世代の柳川をひらいていくことを市民の皆さんに約束しました。その実現を目指して、これからの4年間全力で取り組みます。

ハード・ソフト両面から災害に強いまちづくり

まず1点目は「災害のないまち柳川へ」です。昨年7月14日の九州北部豪雨災害の教訓を今後の防災・減災対策に生かすため「災害の記録」を冊子にまとめ、2000冊を作成して関係者に配布しました。

また、堤防が決壊した中山と六合地区を中心に浸水した水位の表示板を10か所設置するなど、災害の記憶を風化させることなく、行政と市民が一体となつて災害に強い安全安心なまちづくりを進めていきます。

昨年の災害の教訓として、まず連絡体制や避難所での対応が不十分でした。そのため防災計画やマニュアルを見直すとともに、防災行政無線を整備し、屋外スピーカーを37か所に設置しました。また、今後、行政区長や民生委員、消防団幹部などの自宅に個別受信機を設置するとともに、緊急速報メールや電話連絡網などを使って確実な情報伝達に努めていきます。

6つの政策を柱に 笑顔で暮らせるまちづくりのため 4年間全力で取り組む

さらに、お年寄りや障害者など避難に援助が必要な「災害弱者」を支援する自主防災組織の育成や、実際の災害に対応できるよう、避難訓練を日ごろから行っていく予定です。

河川堤防の強化などは、国や県にも強くお願いして、決壊した中山と六合の堤防はすでに完全復旧しています。6月8日には、矢部川・沖端川河川激甚災害対策特別緊急事業の着工が行われました。この事業は5年間で195億円をかけて堤防の強化や浚渫、浸水対策、橋の架け替え、堰の改修などの災害対策工事を行うものです。市としても建設課に災害事業支援担当の専任職員を配置して、国や県と協力して



中山小学校に設置された九州北部豪雨の浸水表示板。災害の記憶を風化させないように中山と六合地区に10か所設置した



3月2日からマルシヨク跡地で行われた辻門市場と巨大さげもん。多くの観光客が訪れてにぎわいをみせた

事業を推進していきます。また、内水を排除するため筑紫町のポンプ場を従来の2倍の排水能力にする工事を行い、中島の北浦排水機場も国に改修を強く要望しています。このようにハード・ソフト両面から災害に強いまちづくりを進めていきます。

地場産業の活性化と 物流拠点へ向け取り組み

2点目は「農・漁・商工業がにぎわうまち柳川へ」です。本市が活力のあるまちになるためには、地場産業の活性化が必要です。農漁業の振興発展と、にぎわいのある商工業のまちを目指して取り組みを進めていきます。

まず、農業については、小麦、大豆の収穫量は県内第1位、米は県内第2位、オクラやつぼみ菜、そら豆、ピーズも県内第1位を誇っており、市の基幹産業です。市内で収穫される農産物を使って、JA柳川と市との共同で商品の開発を行っています。中でも、卵アレルギーの人も食べられるよう卵を一切使わず大豆100%の豆乳で作った「柳川まめマヨ」は福岡産産デザイン賞を受賞し、売れ行きも好調のようです。このような6次産業化を推進し、利益を増やしていくことが今後の大きな課題だと考えています。

次に漁業については、昔から宝の海と言われた有明海は、日本一のノリの産地であり、本市では10億枚、100億円を超える生産額を誇る基幹産業です。昨年の災害で土砂や流木が流れ込んだ影響を心配しましたが、平年並みの収穫があり安心しました。

しかし、魚介類については依然として漁獲高が少ない状況です。有明海をかつての豊かな海に再生し、将来にわたって守り育てていくため、原因調査や、沖合の漁場などの基盤の整備、種苗放流による水産資源の回復など、有明海特別措置法に基づく政策の実施について、国や県に強く求めています。

商店街の振興については、お年寄りなどの買い物弱者にとって身近な商店街は無くてはならない存在であり、地

域の振興や伝統文化を担っている商店街の振興を図っていくことは、まちづくりに欠かすことのできない課題であると考えています。

これまで市では、市内商店街の役員や、商工会、商工会議所と合同会議を設置し、各商店会の個別の課題や、共通の課題を洗い出し、その課題に向けて協議を進めてきています。柳川商店街では、マルシヨク跡地の活用をどのようにに商店街の振興に結びつけていくかが課題で、今後、柳川商店街振興組合と十分協議しながら、対応していきたいと考えています。

企業誘致については、市としてまずは市内にある企業をしっかり支えていくことです。こまめに企業を訪問して、企業のニーズを聞き取っていくことが大事だと考えています。一方で、有明海沿岸道路の整備、みやま柳川インターチェンジの開設などで、交通の利便性が非常に良くなり、本市は南筑後地域の物流などの拠点となる条件が整ってきています。現在、事業者向けの用地のリストアップを行っており、それを基に県と連携し、物流拠点などの企業誘致に向けた取り組みを行っていきます。

また、空き店舗などを利用する実践的なチャレンジショップ運営の支援事業や住宅をリフォームする際の助成などを行うことで地域経済の活性化を図っていきます。

観光客150万人を目標 柳川の魅力をアピール

3点目は「観光と文化の薫り高いまち柳川へ」です。本市の観光の入り込み客数は125万人から115万人と減少傾向で、平成23年は東日本大震災の影響で自粛ムードとなって105万人となりました。24年は少し持ち直してきたものの、九州北部豪雨の影響で例年より減少しているようです。

観光業はすそ野が広く、他の産業とのつながりがありますので、観光が栄えれば他の産業も活性化します。私は、現在の115万人前後の観光客を、10年後には150万人にする目標を掲げ



5月5日に西鉄柳川駅で行われた「第2回おもてなしの心大作戦」。市民をあげて柳川を訪れる観光客をもてなした



今年の柳川祭りさげもんめぐり期間中に催された「水郷柳川ゆるり旅」。地域密着型のメニューに、参加者や事業者からも好評だった

て取り組んでいきたいと考えています。はじめて訪れた土地なのに、どこか古里に帰ったような気持ちになることがあります。人々の温かな対応や、思わぬ親切など、何気ないおもてなしが、訪れた人々に安らぎを与えてくれるからです。それはその土地の良さを強く印象付け、リピーターを増やす大きな要素となります。

川下りコース沿いの清掃やあいさつ・親切運動などを進めることで、市民をあげておもてなしの心「日本一」を目指したいと思います。

今年3月1日から1か月間、「水郷柳川ゆるり旅」を行いました。これ

は、「柳川祭りさげもんめぐり」でにぎわう柳川のまちの中で、柳川の特色を生かして、歴史散歩や食べ物、伝統の技などを体験する19のメニューから楽しんでもらうものです。観光地側で企画する、いわゆる着地型観光によるおもてなしであり、これから力を入れていきたいと考えています。

また、使う人が増えているスマートフォンを活用して、観光施設や飲食店、宿泊施設、イベントなどの情報を提供する観光アプリ「柳川旅物語」が2月に完成。GPSによるナビゲーションシステムも利用できます。これは、県内では北九州市に次いで2番目に導入したもので、今後は英語や中国語、韓国語などの外国語にも対応して、観光客の利便性の向上に努めていきます。

また、昨年11月から観光課内に柳川フィルムコミッションを設立しました。映画やドラマなどの撮影場所を誘致して、映像を通して柳川の魅力を全国にアピールし、知名度アップと観光客の増加につなげようとするものです。

いま柳川の玄関口である西鉄柳川駅の改修を進めています。駅の東側の区画整理事業に併せて東西を行き来できる自由通路の整備とともに、駅舎と西口周辺を柳川のイメージに合わせて整備するものです。エスカレーターやエレベーターを設置し、利便性の向上とイメージアップを図ります。27年3月までには完成する予定です。

また、柳川らしい景観を守り育てるために昨年、景観条例と景観計画をつくりました。色彩や高さの規制などを設け、市民の皆さんにご協力をいただきながら、柳川らしい、より良い景観づくりに努めていきます。

私は、北原白秋のふるさと水郷柳川を誇りとして後世に伝えていきたいと思っています。学校で白秋先生の詩や童謡を学ぶ機会が少なくなると、残念ながら、白秋先生を知らない人が増えてきています。昨年は白秋先生の没後70年でした。これを一つの契機として、もつと白秋先生を全国にアピールしていきたいと考えています。

神奈川県小田原市には白秋先生が8年間住まわれ、生涯で作られた1200編の童謡のうち、約半数の作品を小田原で作られました。昨年の白秋祭のときも小田原市からいらつしやつた代表の皆さんと交流しました。

全国には、白秋先生が作詞された校歌が101あります。市町村歌が10、白秋文学碑も73あります。こうした全国の白秋先生ゆかりの地呼びかけ、「北原白秋サミット」の開催や、姉妹都市、友好都市の締結、また、童謡祭などを開催し、白秋先生を顕彰して全国にアピールしたいと考えています。

安心して子育てできる 魅力あるまちづくりを

4点目は、「子育て福祉のまち柳川

へ」です。子どもはまちの宝です。子どもを生み育てることに喜びを感じられる社会を目指して、次代を担う子ども一人一人の育児を応援し、「子育てするなら柳川で」と言われるようなまちづくりをしていきたいと思っています。このため25、26年度の2か年で「子ども子育て支援事業計画」を策定し、計画的に事業を行っていく予定です。

市の人口は、合併から8年で5500人減少しました。これに少しでも歯止めをかけるために、昨年4月に移住・定住の総合的な相談窓口を企画課内に設置しました。ここでは若者の転出を少しでも減らすことができるよう空き家バンク制度やマイホーム取得支援事業、新婚世帯賃貸支援事業などに取り組んでおり、一定の成果が出始めています。今年度はさらに、3大都市圏や政令

指定都市からやる気のある若者を公募し、柳川ブランドの営業やフィルムコミッション業務、定住対策業務などに従事してもらい、外部からの視点で地域おこしと定住化を目指す「地域おこし協力隊事業」を行います。また、あめんぼセンター横の寄付を受けた空き家を改修し、都市圏の人などの体験居住や観光シーズンのまち歩き休憩施設などとしての活用を図り、定住化を推進していきます。

一番大事なことは、いかに魅力のある柳川のまちづくりをしていくかだろうと思います。産業の振興をはじめ子

育て、福祉、医療、教育、文化、生活環境、安全安心など総合的なまちづくりを進めることで、安心して子育てができ、高齢者や障害者が安心して住める、「住んで良かった」「住み続けたい」と言われるようなまちづくりを目指していきます。

公共施設は改築を進め 老朽家屋の解体を促進

そこで5点目は「便利で住みよいまち柳川へ」です。将来の柳川のための社会基盤整備ができるのは、合併特例債が活用できる今しかありません。

道路や水路の整備をはじめ、大和三橋地区のコミュニティセンター建設や旧柳川地区の校区公民館の改修、老朽化した学校やスポーツ施設、市民会館、市営住宅などの改築を進めます。

市民会館については、第三者の意見を聞いて用地選定を行い、改築したいと考えています。火葬場とごみ焼却施設についても改築が必要な時期にきていますので、みやま市と共同で効率的な広域施設を整備していくことで協議を進めています。

また、環境に優しいまちづくりのため、合併処理浄化槽や太陽光発電施設設置への補助も継続して行います。

市内には適正に管理されず放置されている老朽家屋が増えています。倒壊や飛散の恐れがあり、火災や青少年犯罪などにつながる可能性もありますの



あめんぼセンター東側の寄付を受けた空き家。川下りコース沿いにあり、体験居住や休憩施設などに活用する

で、解体に必要な費用の一部を助成することによって解体を促進していくことにしました。

行財政改革を進めて スリムな行政に

6点目は「市民目線で行革のまち柳川へ」です。合併の優遇措置がなくなるときのことを考えて、行財政改革を進め、行政をスリム化する必要があります。人件費などの削減や、経費の節減、税収や各種使用料などの収入の確保に努めていきます。また、庁舎統合も検討したいと考えています。

財政運営については、将来の見通しを再度シミュレーションして「中期財政計画」を策定し、計画的で健全な財



老朽化により改築を予定している市民会館。第3者などの意見を聞きながら、機能や用地選定を行っていく

政運営を図っていきます。

以上、6つの政策を実現するため職員とともに全力で取り組んでいきますが、これは行政の力だけでできることではありません。旧1市2町の垣根をできるだけ早く取り払い、「柳川は一つ」という意識を持って、市民と議会、行政が一丸となって取り組んでいくことが必要です。そして、合併して本当に良かったと思えるまちになるよう頑張っていきます。

以上、市政運営への私の所信の一端を述べました。「活力があり、みんなが笑顔で暮らせるまちづくり」のため、これから4年間全力を傾けていきますので、皆さんの一層のご理解とご協力をお願いし、所信表明といたします。